



第12回

モーツァルト交響曲
全曲演奏会

2013年 5月12日(日)

◆開演◆ 14:30◆

— 会 場 —

安曇野市・豊科交流学習センター
「きぼう」

主催／モーツァルト交響曲・全曲演奏会 実行委員会

後援／松本市・松本市教育委員会・塩尻市・塩尻市教育委員会・安曇野市・安曇野市教育委員会・信濃毎日新聞社
SBC信越放送・NHK長野放送局・長野エフエム放送・あづみ野エフエム放送・(公財)八十二文化財団



よこしまかつと

モーツァルトには有名な協奏曲が数多く、ピアノはもちろん管楽器のファゴットに至るまで、様々な楽器に対して書かれています。他の作曲家と比べても群を抜いて多いのです。

6年目に入った今回の全曲演奏会では、その魅力溢れるモーツァルトの協奏曲について考察していきたいと思います。

【ライフワークとしての協奏曲】

モーツァルトは、ほとんど一生の間、協奏曲となんらかの関わりをもっていたと言ってもよいであろう。幼少期のモーツァルトをよく識っていた父親の友人の伝えるところによると、彼が4歳のころ、父親が帰宅したときに一生懸命ペンを動かしていたのは協奏曲を作曲していたからであったし、以来、モーツァルトは学習の材料として、あるいは第三者の依頼により、あるいは自分自身をはじめとして弟子や特定の演奏家、友人たちのために、なんらかの協奏曲を死の年にいたるまで、ほとんど切れ目なく作曲し続けているのである。

第1回全曲演奏会のプログラムノートでご紹介したその4歳のモーツァルト少年のエピソードを、ここでもう一度ご紹介しよう。

モーツァルト家と仲が良く宮廷トランペット奏者のシャハトナーはこう回想している。

……最初はまるでちんぷんかんぷんだったので、私たちは大笑いした。だが、まもなく、父親にはその最も重要なもの、譜や音楽が読み取られてきた。彼はしばらくその紙切れを見ていたが、やがて、喜びと感激の涙がその眼からこぼれた。見てください、シャハトナーさん、これはすべてきちんと正確に書いているんですよ。ただ実用的ではないですがね。それは難しくてだれも弾けません。と父親が言った。するとヴォルフガングは「だからコンチェルトなんだよ。ちゃんと弾けるまで練習してくれなくっちゃだめだよ。いいかい、こうやってやるんだ」と言った。そして彼は弾いて見せた。すると彼が何を意図していたのかが、私たちにもわかってきた。……

モーツァルトが幼い頃からヴァイオリンの演奏にも秀でていたことは、彼のピアノでの活動の陰に隠れがちである。ザルツブルグ宮廷楽団のヴァイオリン奏者で、18世紀の貴重な文献『ヴァイオリン教程』の著者としても有名な父親から音楽の教育を受けたモーツァルトは、13歳でザルツブルグ宮廷楽団の無給の、16歳で有給のコンサート・マスターとなっており、父親によれば「当代随一のヴァイオリン奏者になれる」(1777年10月18日付の父の手紙)ほどの腕前の持ち主であった。しかし、父親の期待に背き、演奏者としてのモーツァルトの興味は次第にヴァイオリンから離れてクラヴィーア(ピアノ)へと向かい、1781年、ウィーンに移住してからの演奏活動はクラヴィーアのみに限られてしまう。そしてそれと並行して、ヴァイオリン協奏曲をはじめ、ヴァイオリン・ソロを中心とする曲も書かれなくなった。

【モーツァルト時代の協奏曲】

一般に協奏曲といえば、交響曲と同様の編成と構造を持ちながら交響曲ほど堅苦しくなく、独奏者の技巧のかぎりを尽くして華麗な楽句を練り広げていく楽曲である。18世紀後半の協奏曲も例外ではないが、交響曲がどちらかといえば構成美や、弦と管の対比と調和、オーケストラの豊かな響きを追求していたのに対し、協奏曲は独奏者を引き立たせるフレーズやカデンツァをもち、むしろ単純、明快な構造と、一種の華やいだ社交的な雰囲気をも主体とするものであった。演奏される場も、限られたサークルや私的な予約演奏会が一般的であって、どちらかといえば機会音楽、社交音楽としての性格が強かったのである。そうした協奏曲は、様々な楽曲で構成される一夜のプログラムのなかで、聴衆の耳を楽しませるとりわけインティメイトな作品であった。

モーツァルト自身、協奏曲のそうした特徴をよく知っていた。1782年12月28日にモーツァルトが父親に宛てた書簡には、協奏曲は「むずかしすぎず易すぎもせず、まさにその中間で、とても華やかで一聴いていて快く一自然で、空虚に陥らず一いたるところで識者を満足させます— それでいて識者でない人も、なぜだかわからないまま、満足してしまうようなものです」と記されているが、この一文は当時の協奏曲の特徴を見事に言い表わしていると言えよう。

PROGRAM NOTE

【コンチェルトの名手】

モーツァルト・ファンには協奏曲の好きな人が多い。後期のピアノ協奏曲にこそモーツァルトの内面の声が聴ける、と語る人にしばしば出会うし、クラリネット協奏曲や二つのフルート協奏曲、またフルートとハープのための協奏曲も、熱心なファンをもっている。これは、師であり友人であったハイドンに協奏曲の名作が少なく、愛好家の目がほとんど交響曲や弦楽四重奏曲に向かっているのとは、際立った対照をなす事実である。このことは何を物語るのであろうか。

これはすなわち、モーツァルトの音楽の書き方に、本来協奏曲というジャンルの本質を生かす何かがある、ということだろう。18世紀を通観してみると、協奏曲が器楽曲の花形の地位を占めていたのは前半のバロック時代であった。

作曲家のリーダー格は、ソロ・コンチェルトの完成者であるイタリアのヴィヴァルディであり、ドイツのバッハ、イギリスのヘンデルも、すぐれた協奏曲を多く書いている。

これに対し、世紀もなかなば以降、前古典派から古典派の時代になると、交響曲や弦楽四重奏曲が登場し、大きな比重を占めるようになる。作曲技法の点からすれば、協奏的原理が、新しい交響的原理に取って代わられてゆくわけである。

だがその中でモーツァルトは、すぐれた協奏曲を数多く書き、他のジャンルにおいても、協奏的な原理を積極的に活用した。これは、交響的な原理を中心に捉えていたハイドンやベートーヴェンとは、対照的なやり方であった。

【セレナードにおける協奏的なもの】

ひとつの楽器に、あるいは一對の楽器にスポットを当てて、それをプリマドンナのように歌わせる。また、管のグループと弦のグループとを語り合わせ、色彩と情緒の豊かな変化を楽しませる……。こうしたモーツァルト音楽の醍醐味というべき技法は、協奏曲の書かれる以前から、別のジャンルにおいて準備されていた。

まずその土壌となったのは、実用的な合奏曲のジャンルであった。西方大旅行中にオランダで書かれた楽しい祝祭音楽はその実験の記録であり、その試みはさらに、ザルツブルグにおけるセレナード音楽(第8回全曲演奏会プログラムノート参照)に受け継がれた。ヴァルター・ゼンの指摘するように、当時多楽章形式のセレナードはザルツブルグにおいてたいへん好まれ、もろもろの祝典的な機会にかなり大規模に演奏されて、街角や

庭園を彩っていた。そこでは、たとえばヴァイオリンの独奏する甘味な旋律が、聴き手を楽しませるのであった。したがって、モーツァルトが書いた一連のザルツブルグ・セレナードにおいても、第二楽章から第四楽章にかけては、気軽な協奏曲というべき一角を形成することが少なくない。モーツァルトは、協奏曲以前にそこで、協奏風の手法を磨くことができた。

モーツァルトの五つのヴァイオリン協奏曲は、その流麗典雅な作風からみて、セレナードの協奏風楽章が発展し自立したものととも解釈することができよう。

【モーツァルトのヴァイオリン協奏曲の謎】

モーツァルトの協奏曲は、現存する最初のオリジナルな協奏曲《ヴァイオリン協奏曲 変ロ長調》KV207から、最後の《クラリネット協奏曲 イ長調》KV622にいたるまで、ひとつの共通した構造をもっており、その点で他のあらゆる作曲家たちの協奏曲と異なっている。

多くの点でモーツァルトを模倣しようとしたベートーヴェンでさえ、協奏曲に関してはモーツァルトの原型を再生産する道は選ばなかった。—おそらく動機の扱いがきわめて複雑だったからであろう。周知の通り、ベートーヴェンにおける動機の構成法や使用方法には、ハイドンの実例の反映が見られる。ベートーヴェンにとってもモーツァルトの旋律楽想の過剰さは放逸とさえ見えたのかもしれない。

モーツァルトは、5曲のヴァイオリン協奏曲のシリーズを書き始め、独自の美しい形式を創造したあとで、突然にやめてしまっている。なぜ始め、なぜやめたのかは謎めいている。モーツァルトはそれらの協奏曲をドイツ国内の旅行の時には自分で弾いているが、一曲（ヴァイオリンとヴィオラのためのシンフォニア・コンチェルタンテKV364）の例外を除いて、彼はヴァイオリン協奏曲という形式に興味を失ってしまうかのように見える。

モーツァルトがヴァイオリン協奏曲をやめてピアノ協奏曲へ向かう理由は、おそらく、父レーオポルトに対するフロイト的な拒絶といったものではないであろう。一方、同じ頃のピアノ協奏曲という形式はまだほんの幼児期にあり、おそらくモーツァルトは、この形式の中にはまだ未開発の沃野があるので、ヴァイオリニストとしてよりも、ピアニストとしてのほうが、より光輝いた存在となり得る、と考えたのであろう。

PROGRAM NOTE

●ヴァイオリン協奏曲 ト長調

Konzert in G für Violine und Orchester KV216

(19歳 1775年9月12日 ザルツブルグで作曲)自筆譜による。

1780年に修正されたのち1775年に戻されている。

Allegro, Adagio, Rondo/Allegro

モーツァルトのヴァイオリン協奏曲は1773年にKV207の第1番、1775年に残りの4つが作曲された。これらは当然のことながら、モーツァルトの初期の作品の中では最も知られたものであり、これらが甦ってからまだ百年も経っていないのだが、それ以来ずっとヴァイオリニストたちのアイドルとなってきたものである。

仮にベートーヴェンが死ぬ頃のヨーロッパに生きていたとすれば、モーツァルトのヴァイオリン協奏曲を聴く機会などあろうはずがなく、それらは全く忘れられた存在だった。それから考えれば、現在の人気はすばらしい現象である。

しかし、それにつけても、これらの五曲が、いずれもモーツァルトの生前に出版されたことがないというのは驚くような事実ではなかろうか。

それらは全くの“機会音楽”として書かれ、主としてザルツブルグという地域の中だけで使われただけで、あとはマンハイム・パリ旅行の途次、ヴァイオリン協奏曲が必要だった時に役立ったに過ぎない。だから1770年代には、ザルツブルグの人か、ミュンヘン、マンハイムなどで、幸運にも聴く機会があったような人たちを除けば、この曲を聴いたものはいなかった。

【シュトラスブルグ協奏曲】

第2番(第7回全曲演奏会プログラムノート参照)において様式的な変化をみせたモーツァルトは、それよりわずか3ヶ月を隔てているだけのこのト長調第3番において、今度は質的に驚くべき大きな飛躍を遂げている。

全体的にはフランス趣味が強いが、形式、あるいは独奏と管楽器の扱い方などに工夫がこなされている他、管楽器の活用による音響、音色上の充実も図られており、曲のすみずみまでいかにもモーツァルトらしい個性が溢れる傑作となっている。

ところでモーツァルトはアウクスブルグから父に宛てた1777年10月23日付けの手紙の中で「その夜(1777年10月19日)夜食の折にぼくはシュトラスブルグ協奏曲を弾きました」と書いている。この曲はかつて第4番と考えられてきたが、近年この第3番の3楽章のアレグレットの旋律が「シュトラスブルガー」と呼ばれる民謡と同じであることがわかり、この第3番こそ『シュトラスブルグ協奏曲』であるとする説が有力になっている。

●交響曲 ヘ長調

Sinfonie in F KV75

(15歳 おそらく1771年3月28日～8月13日 ザルツブルグで作曲)

Allegro, Menuetto-Trio, Andantino, Allegro

1771年3月28日に1年4ヶ月に及ぶ最初のイタリア旅行から帰郷したモーツァルトは、同じ年の8月にはもう2回目のイタリア旅行に出発することになるが、ケツヒェル第6版によって、その間5ヶ月のザルツブルグ滞在中に作曲されたものとみなされている交響曲が2曲ある。

その一つがヘ長調KV75である。だがこの曲は、自筆譜はおろか信頼に足る同時代の写筆譜すら残っておらず、信憑性がはなはだ薄い。

かつてブライトコプフ社に一組の筆写パート譜があったことは知られているが、今はこれも失われており、現在残されているのは、それをもとに19世紀に作られた2組の筆写譜だけなのである。したがって当然ケツヒェル初版以来現行の第6版に至るまで踏襲され、またヴィゼワ、サン＝フォア、アーベルトといった人達によっても受け入れられてきた1771年ザルツブルグという成立データも、今日の視点から見ればほとんど根拠のないものと言わざるを得ない。

PROGRAM NOTE

●交響曲 ト長調

Sinfonie in G KV199 (161b)

(自筆譜の日付は抹消されている。五線譜に使用されているものは、モーツァルトが1773年から1775年に使用したタイプ)

Allegro, Andantino grazioso, Presto

【自筆譜合本の謎】

1773年から74年にかけて書かれた交響曲は全部で9曲であるが、それらの自筆譜は父レーオポルトの手によってまとめて製本され、その後様々な人々の手を経て今日に伝えられて来た。だがこの「自筆合本」は、その伝承のかなり早い段階のうちから、各曲の表紙に記された作曲年月日のデータが抹消されていた。

それを誰がやったのか、正確なところは不明だが、例えばモーツァルトの遺族たちが(あるいは本人かもしれないが)、古い作品を新しいものと見せかけて出版ないし販売しようとした、というような可能性が考えられている。

消し潰された日付の多くは後世の人々の努力によって解読されているが、残念ながらまだ不確かな部分も残っている。

この交響曲ト長調KV199は、その不確かな部分の一部である。

★参考文献

- 「モーツァルト事典」海老沢 敏 著、
- 「モーツァルト」メイナード・ソロモン著、
- 「モーツァルト＝翼を得た時間」磯山 雅 著、
- 「モーツァルト大事典」ロビンズ・ランドン著、
- 「モーツァルト」ロビンズ・ランドン著

